

論文(Article)

「評価」を生かした保育所改善 プロセス実践の試み

The trial of the nursery school improvement
process centering on “evaluation”

朴 信永
Park Shinyoung*
伊藤 一統
Itoh Kazunori**

摘 要

本研究では、「評価」を保育実践の改善において生かすべく、その実施方法を工夫し、「評価」がどのように保育実践の改善に結びついていくのか、また、保育者の意識にどのような変化を生じさせていくのかをみるための実践を試みた。保育者自身による自己評価だけでなく、保育所を取り巻く地域社会の方々を評価者として招聘し、外部評価も行った。一連の実践を通して、「自己評価」に関する職員の意識の変化、職員間の情報共有の重要性の認識、自園の保育課程および保育計画の再認識、他の園との交流をとおした改善点の確認、地域協働による保育づくりの重要性の認識などの成果がみられた。「評価」を単なる良し悪しの判断ツールとしてではなく、職員間、さらには地域社会と保育所との「協働」のツールとして位置づけたところに本取り組みの特徴がある。

キーワード：外部評価、第三者評価、自己評価、保育所、反省的实践、保育の質、改善

Key words : External evaluation, Third-party evaluation, Self-evaluation, Nursery school, Reflective Practice, Quality of childcare, improvement

1. はじめに

平成 10 年、改正児童福祉法が施行され、保育所について、地域住民に対して保育に関する情報の提供を行うよう努めることとされた。平成 14 年 4 月には第三者評価基準や評価の方法等について指針が作成され（「児童福祉施設における福祉サービスの第三者評価事業の指針」平成 14 年 4 月 22 日、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長）、平成 20 年 3 月に告示された保育所保育指針では、保育士等および保育所の自己評価ならびにその公表が努力義務として位置づけられた。平成 14 年の第三者評価事業指針によると、保育所第三者評価の目的は、一つ目が保育の質の向上、二つ目が地域住民への情報提供とされる。しかし、実際、第三者評価のための項目の数の多さや

* 椋山女学園大学教育学部子ども発達学科

** 宇部フロンティア大学短期大学部保育学科

手続きの煩雑さは、多忙を極める保育の現場にとっては負担が軽い。そのため、評価のための評価、すなわち評価自体が目的化してしまい、保育の質の改善に結びついていないような場合を多々見ることとなる。これは、自己点検についても同様だ。このように、保育の評価の法制化・制度化には懸念される問題や課題も少なくない(垂見, 2010 など)。

本研究では、「評価」を生きたものにすべく、そのやり方を工夫し、実践する中で自己評価・外部評価がどのように保育実践の改善に結びついていくのか、また、保育者の意識にどのような変化を生じていくのかといったことを明らかにしていくことを目的とする。保育計画 (Plan) → 保育実践 (Do) → 自己評価・外部評価 (Check) → 保育の改善 (Act) の流れをベースに、そこで保育を営む保育者たちが、日々の保育について、何を根拠に取り組んでいるのかを自覚的にとらえ、反省的实践を実際化するための具体的モデルを構築・試行する。中でも、特に、「評価」の点を重視し、保育者自身による自己評価とともに、保育所を取り巻く地域社会の方々を外部評価者として招聘する方法を工夫した。

2. 評価・改善モデルの構築

本研究における研修計画は、厚生労働省の「保育所における自己評価ガイドライン」に基づく自己評価理念モデル(全国保育士養成協議会現代保育研究所, 2009)を参考に、図1のように設定した。

2.1. 評価

前述のように、今回の取り組みの中で中核を占めるのが「評価」である。組織における「評価」は以下の三つに大別される(教育調査研究所研究紀要第87号, 2007 など)。

- ① 自己評価(当事者評価): 教職員による評価
- ② 外部評価(関係者評価): 関係者による評価(自己評価結果の検証)
- ③ 第三者評価: 当事者・関係者ではない者による評価、園が主体となって進めた評価結果を基礎的な評価資料としつつ、それらの評価結果を含む園運営全体について、専門的・客観的立場から評価する。

この分類から、保育所の外部評価とは、当事者以外の保育所関係者(=子どもや保護者、地域住民など)による評価(=園の自己評価の結果と改善策の点検と改善の提言など)となる。なお、外部評価のうち当事者でも関係者でもない者によって行われる評価を、特に第三者評価として区別する。

本研究において、一つの柱ともなるのが、園外の者による「外部評価」の実施である。外部評価によって「評価」に信頼性と客観性を付加することを第一義とするものであるが、本研究では、副次的な効果として、外部評価の活動を通じ、外部たる評価

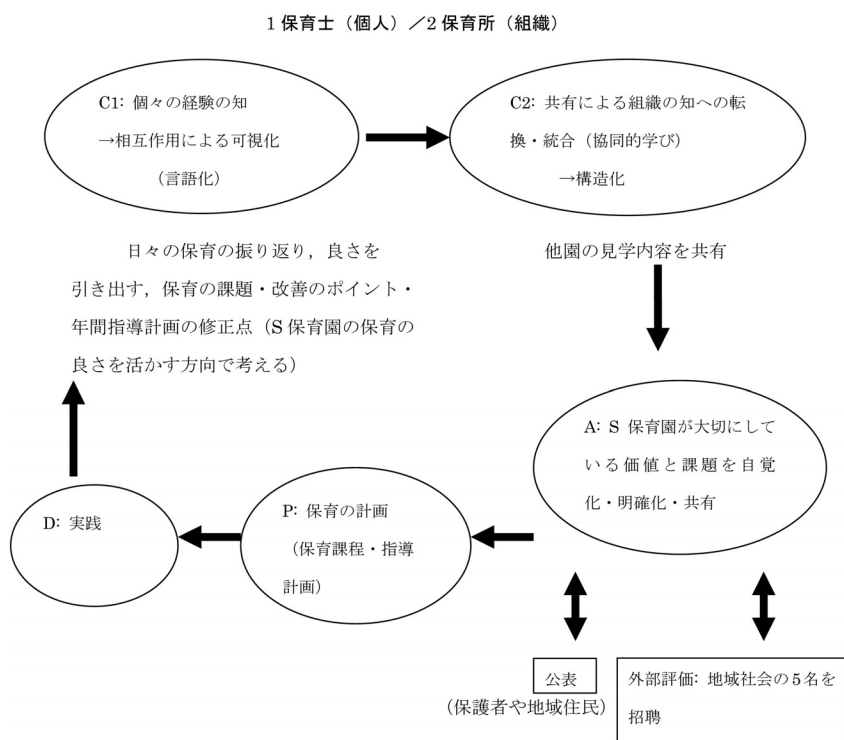


図1 評価・改善モデル

者の方々にも園の理解を深めてもらうことを狙っている。

保育所保育の評価に関する各項目は，全国保育士養成協議会の児童福祉施設福祉サービス第三者評価機関（HYK）の保育所第三者評価項目を援用することとし，下記のような内容で構成した。

- ①保育の理念・基本方針
- ②施設長の責任とリーダーシップ，人材の確保・養成
- ③利用者本位のサービスの実施計画の策定，サービスの質の確保
- ④子どもの健康管理・食事，安全・事故防止
- ⑤入所児の保護者の育児支援，地域の子育て支援
- ⑥保育環境
- ⑦保育内容，子どもの発達援助の基本

2.2. 研修

「評価」を生きたものとしていくための手段として，「研修」を位置づけた。今回の取り組みでは，2つの「研修」を行っている。ひとつが，自己評価に対する理解を深め，その質の向上を図ることを目的とした「職員研修」である。もうひとつが，評価

の視点を豊かにし、自己を客観視するための「研究・研修会」を実施した。この「研究・研修会」のプロセスは図2の通りである。

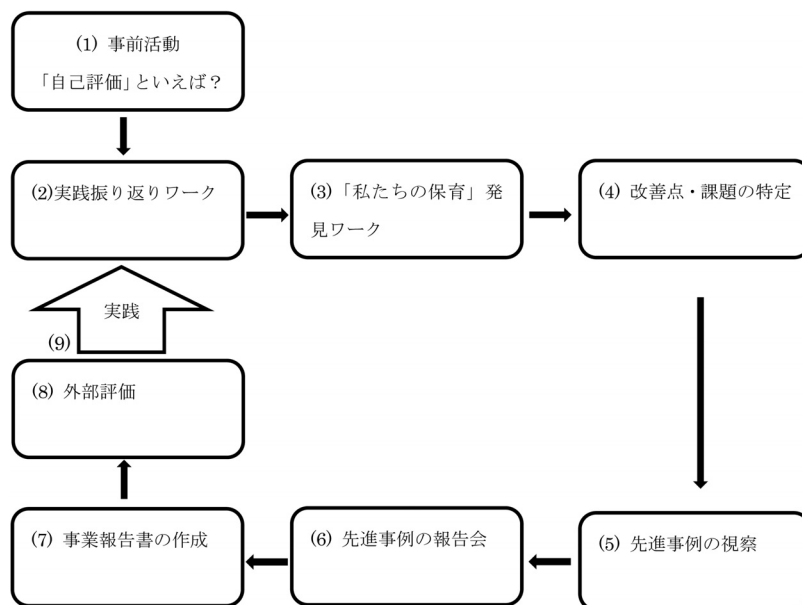


図2 研究・研修会のプロセス

3. 評価・改善プログラムの実施

3.1. 研究・研修会の実施

研究・研修会は、2010年5月から2011年2月にかけて、A県B市S保育園の保育者を対象に週1回行った。参加者は園長、主任保育士、各クラスのリーダー保育士であり、自己評価および外部評価の方法について模索・実践した。

3.2. 職員による自己評価

2010年5月18日、研究会の趣旨・目的を説明し、‘無理なく、楽しくできることをやる’‘内発性に基づく自己評価’を実施するに当たって、まず、事前活動として「自己評価」と聞いて思い浮かぶ内容について書いてもらった（図2の(1)に該当）。この活動は、各々の保育者が普段評価について‘よくないところを見つけて直す’という否定的なイメージを持っていることを表面化するためであった。

次の段階である図2の(2)実践振り返りワークでは、楽しくできる自己評価方法を紹介することをねらいとし、社団法人全国保育士養成協議会の現代保育研究所（編）の「やってみよう！私の保育の自己評価(2009)」に示されている自己評価方法に基づき、実践振り返りワークを企画した。詳細は下記のとおりである。

- 1) 自分たちの良さを引き出す
- 2) 自分たちの保育を振り返る
- 3) キーワードを浮かび上がらせる
- 4) 園が大切にしている価値を見いだし、課題を特定する
- 5) 保育課程・年間指導計画を見直す
- 6) 実践する

実際、2010 年 5 月 18 日から 2 週間にかけて、次のような視点を設定して、自園の良さをを見つける作業を実施した。

- 保育において普段気をつけていること（私の保育において心がけていること）
- よい実践だと思われること（S 保育園の良さ）
- 私の保育で大切にしていること（私の保育の良さ）
- 保育課程に基づいたよさ
 - －「保育課程」に合致している、良い実践
 - －「保育課程」に照らしてみても、普段の保育で気をつけていること

作業では、まず、付箋紙に上記について記載し、広いボードに貼り出した。1 枚の付箋紙について一つの事項だけを書くことにした。その後、2010 年 7 月 1 日職員会議において、集められた付箋紙を研究組織全員で分類し、分類したグループごとにキーワードを付ける作業を行った（図 2 の(3)「私たちの保育」発見ワークに該当）。この活動の目的は、保育者間の情報共有および共通理解を図ることを通して、自分自身の保育と S 保育園の保育を改めて見直し、「組織としての保育力を高める」ことであった。活動の終了後に書いてもらった感想カードには、活動中、同僚との間で対話が生まれ、それぞれの保育者としての思い、園の状況に関する情報の共有といったことがなされていったことが示されていた。

次に、図 2 の(4)改善点・課題の特定では、S 保育園の良さ、各自の保育の良さを活かす方向で下記について書いてもらった。

- 園が大切にしている価値を見いだし、課題を特定する
- 園として、あるいは保育者として考えられる、保育の改善のポイントを考える
- 保育理念・保育方針・保育目標・年間指導計画の修正点を考える

記述のうち、担任保育者 3 名の記述を以下に記す。

・保育者 A：地域に密着し活動する S 保育園であるために、これからも地域の活動に積極的に参加し、地域の方々に愛される S 保育園であってほしい。子どもの気持ちを第一に考えることはもちろんだが、その子を育てている保護者の気持ちも理解しよ

うとし、気持ちに寄り添って一緒に子どもたちを保育していこうという気持ちを持つことが大切である。保育課程、年間指導計画は年齢ごとに考えられているので横のつながりに目を向けてみることも大切だと思う。

・保育者B：園が大切にしている、子どもたちにとっての最善の利益（その子にとっての一番必要で適切な関わり）のために日々、一人ひとりをよく見て気持ちに寄り添うことをこれからも一番大切にしていきたいと思う。今ある恵まれた自然環境、物的、人的環境を意識し、子どもたちが心身ともに健康で安定して過ごせるように配慮していくことが大切だと思う。子ども一人ひとりをよく見て、丁寧に関わることで見えてくる最もふさわしい適切な援助ができる保育士でいられるように、そのために必要な専門的な知識や豊かな感性を常に意識して磨いていくことを努力していきたい。目の前の子どもたちにしっかり目を向けることで指導計画などの内容が変化していくと思うので、しっかり子どもを見つめていくことがとても大切だと思う。

・保育者C：園は子ども一人ひとりを大切にされていて、地域の人とのつながりを大切にしていると思う。これからは、もっと幅広くさくら保育園をいろんな人に知ってもらえるように活動することができたらいいと思う。保育者自身が保育に対していろんなことを勉強し（研修など）、自分自身を向上させることが必要だと思う。自分の保育に対して、日々向き合い良い面、悪い面をみつけ直さなければならないと思う。そのことに対して、他の保育者からアドバイス等してもらうことも大切だと思う。日々の保育に追われ、保育理念、保育方針を全うするのは、本当に難しいと思う。しかし、保育者同士が保育に対して同じ思いで、保育理念に近づこうと努力すれば、子どもたちのためによりよい保育ができると思う。年間指導計画が園やクラスの子どもに合ったよりよいものになるように計画しなければならないと思う。

3.3. 先進事例（保育所・幼稚園等）の視察について

今まで行ってきた自己評価活動を振り返りつつ、外部園の先進事例を視察・把握することは、上記のように探し出された課題および改善点を具体化するのに役立つと思われる。そこで、2010年9月、外部の保育所、幼稚園、計6園を視察する計画を立てた。視察時、各保育士には、①これは！「S保育園」のほうが優れている！②これは、「S保育園」に取り入れたい！③保育所と幼稚園は何が違う？④自分自身の役に立ちそうなものは？について書いてもらい、2010年12月1日報告会を実施した。図2の(6)先進事例の報告会の目的は、研究会の構成員全員（S保育園の職員全員）が他園の先進事例に関する情報を共有することであった。そのため、視察に行った保育者がプロジェクターを使って写真を見せながら、各視察先について説明を行った。自己評価活動の一環として外部園を見学することは各々の保育者にとって強い刺激となった様子であった。一方で、外部の園を観る機会がほとんどない保育現場の多忙さ、園同士の交流の難しさが窺えた。

3. 4. 外部評価の実施

外部評価に先立ち、2010 年 12 月 21 日、各クラス内の協議の上、表 1 の様式に基づいて事業報告書が作成された。これをもとにして、ここまで行われた活動をまとめ、S 保育園の取り組みおよび改善点などの事項を中心に自己評価資料を作成した。この「自己評価資料」は、全国保育士養成協議会の児童福祉施設福祉サービス第三者評価機関（HYK）による保育所第三者評価項目に基づいて、園の活動の状況をまとめたものである。具体的には表 2 に示す大項目に基づき作成し、A 4 用紙で 11 ページに達した。これを第三者評価の資料として、評価者に事前に配付した。

表 1 事業報告書の様式

事業名 (活動名)		
担当者氏名		
実施年月日 (~)		
主な活動場所		
講師等招へいの場合、その氏名・所属		
事業(活動)の目的		
参加者 ※内訳(氏名・人数) を記入のこと	子ども	
	職員	
	その他	
事業の概要		
所見		
課題 ※改善すべき点等、申し送り事項を記入のこと		

表2 第三者評価項目

I	福祉サービスの基本方針と組織について
I-1	理念・基本方針
I-2	計画の策定
I-3	管理者の責任とリーダーシップ
II	組織の運営管理
II-1	経営状況の把握について
II-2	人材の確保・養成について
II-3	安全管理
II-4	地域との交流と連携
III	適切な福祉サービスの実施
III-1	利用者本位の福祉サービス
III-2	サービスの質の確保について
III-3	サービスの開始・継続
III-4	サービスの実施計画の策定

本研究における外部評価の目的とするところは、①内部評価（自己評価）について客観性や妥当性を検証し適切性を確保すること、②園の活動について外目で客観的な指摘をしてもらうこと、③地域住民から園の教育・保育活動や運営に対する理解と参画を得ること、があげられる。

外部評価会議は、S 保育園において 2011 年 2 月 14 日 15 時より、評価者 5 名（表 3 参照）に加え同保育園の理事長、園長、および 0 歳児から 5 歳児までの各学年の保育リーダー保育士 6 名、それに栄養士 1 名が出席し、研究会のメンバーである筆者（朴）の司会で行われた。評価にあたっては、評価者に事前配付した自己評価資料の内容を中心として、日常の S 保育園の取り組みや様子について、また外部の視点から考える同保育園の改善点などの事項について意見を述べてもらい、適宜、S 保育園関係者との意見交換を行う形で実施した。

表3 外部評価者の素性

市社会福祉協議会事務局長
市立小学校教頭
地域老人会元会長
S 保育園苦情解決第三者委員
大学教授

外部評価会議では主に情報発信の方法や、地域づくりの主体としての園の重要性などについて意見交換がなされた。

まず、情報発信については「ほぼ毎日 S 保育園の前を通っているにも関わらずこ

の機会を通して初めてさまざまな活動を知ることができた’ ‘小学校の場合、学校だよりは自治会長や見守り隊に配ったり、回覧板で回したり、児童たちを保育園などに行かせ配付している。卒園児に向けて発信してみてもはどうだろうか。’などの意見が出された。これらに対して園側からは、‘園庭の防犯カメラはパソコン、携帯電話で見られるようになっていて、ブログは週2-3回更新しているが、これだけでは不十分だと思った。小学校の先生と保育者との交流はあるが、子どもたち同士の交流は無い。以前運動会の時、かけっこには来てもらっているが、和太鼓は人数が増えたため、園児たちのみで行っている。これから交渉していきたいと思う。『アサギマダラを見る会』、『ヒメボタルを見る会』には卒園児にも声をかけてみてほしいと思う。’などの回答があった。

また、地域における保育園の役割に関連して‘昔は地域で子どもを育てていた。核家族化しているから地域とのふれあいが少なくなっている。夫婦共働きの家庭が多いため、昼間に地域にいる人が少ない。S保育園を中心に昔のように地域とのつながりが復活するとよいと思う。S保育園の園長先生は地域の活動にも顔を出してくれるので嬉しい。’ ‘自分の子どもを育てるときは余裕が無く一生懸命でよくわからなかったが、ここへ来て初めて気づかされることも多く、子どもの可愛さを知った。地域の方にもS保育園で子どもと関わる良い経験をしてほしいと思う。保育園の前を通ると子どもたちが話しかけてくれたり、鉄棒を見せてくれたりする。なるべく保育園の前を通って行きたいと思う。何かのときには、お手伝いをするので、是非声をかけていただきたい。’などの意見が出された。小学校の関係者からは、‘小学校でS保育園から来た子どもたちの様子を担任に聞いたところ、一人ひとりに目を配っている様子がよくわかる、個性を大事にした教育ができていたと言われた。’と述べられ、今後、議論を深め保小連携に広げることが願われた。

問題点としては保護者の送迎時の駐車場でのマナーが挙げられ、一人ひとりの保護者にも地域の皆で子どもを育てているということを意識化することが求められることを確認した。最後に、‘日ごろの精一杯の保育で多忙にもかかわらず、このような研究に取り組もうという気持ちこそが大切である。これからも続けて頑張っていたきたい。’といわれた。

外部評価の終了後は、自己評価および外部評価を振り返って、感想やコメントなどを書いてもらった。一部を下記に示す。

- ・保育園の良いところを見つめ直すことができた。日頃はなかなか考えることができないが、このような機会を持ててよかった。
- ・最近、保護者との関わり、伝えることの難しさを感じる。保護者と子どもとしっかり関わっていききたい。
- ・S保育園しか知らないなので、この研究で他園を見学することができて勉強になった。S保育園の良いところを再確認できた。
- ・研究によって、保育園を見つめ直すことができた。子どもはもちろんだが、大人も

褒められると嬉しいと思った。

- ・年長児は地域の方と触れ合う機会が一番多いが、また遊びたいねなどと言う子どもの表情から地域の方とのふれあいがとても大切だなと感じる。年長だけでなく、子どもたちと地域の方とのふれあいがもっと増えたらいいと思う。
- ・研究によって客観的な面を持てた。子どもたちと保護者との関わりをこれからも大切にしていきたい。
- ・今、食育の研究に行っても、地域との交流という課題がよく取り上げられている。今以上に地域との関わりを増やしていけたらいいと思う。
- ・もっと地域の方と交流し、地域に根ざした地域での子育て力を高めていきたい。

3.5. 外部評価の成果

地域での園に対する評価、園の活動に対するアドバイス、期待される地域への園の役割などが聞かれたほか、今回の研究の取り組みに対する高い評価の声があった。評価者には、S 保育園にゆかりのある方が殆どで、比較的園の活動に関する知識をもっていたが、今回の評価活動において、認識を新たにされたことが多かった様子であった。

結果として、保護者のマナーを中心として若干、「地域の保育園」としての課題にも言及があったが、総じてS 保育園の活動に対してたいへん高い評価が示された評価会となった。そして何より、こうした研究活動への取り組みと評価会を開催したことについて、評価者側と園側の双方がその意義を非常に高く評価したこととなった。

4. 評価・改善活動を実施して

一連の評価・改善活動を実施して、職員の意識面を中心に幾つか取組の成果と思われる変化を見ることができた。

(ア)「自己評価」に関する意識の変化

実施前には、「自己評価」と聞いて、どちらかというと‘悪い点を見直し反省する’‘問題点を明確にする’というマイナス面を思い浮かべていた保育者が多かった。しかし、研修後は‘S 保育園のよさや自分の保育のよさなどを探すこと、そのことが自信につながり、たくさん存在するよいところを維持し、これからも向上させていくこと’であるとする保育者が多くなっていた。

(イ)職員間の情報共有の重要性の認識

「職員研修」では、日々の保育を振り返り、保育園のよさや自分自身の保育のよさを引き出す作業を保育者全員で行った。取り組みの実施後に職員たちから出してもらった感想では、‘他の保育者の思いも知ることができ、自分の保育との照らし合わせなどもできた’‘職員の共通認識も感じる事ができてよかった’‘いろいろな先生たちの保育観や思いを知ることができた’などの記述が見られた。職員全員で園のよ

さや保育について一緒に検討する機会があまりなかったことに保育者自らが気づき、子どもたちの成長の様子や、先生たちの思いなども知ることの重要性を再認識したものとえよう。これらは保育園が大切にしている価値と課題を自覚化・明確化・共有することにつながると考えられる。

(ウ)自園についての再認識

適切な自己評価ができるように、①園が大切にしている価値を見だし、課題を特定する②園として、あるいは保育者としての保育の改善ポイントを考える③保育理念・保育方針・保育目標・年間指導計画の修正点を考えるといった活動を、自園の良さを見出す、活かすという方向でもって行った。これは、普段わかっているようで十分に省みる機会の少なかった保育課程および保育計画について再認識を行うこととなり、その改善点を考えるまでに至った。

(エ)他の園との交流をととした改善点の確認

今回、「研究・研修会」において、幼稚園3園、保育園3園を見学し、S保育園に取り入れたいことや、保育所と幼稚園の違いなどについて考える機会を持った。他の園を見学し、見学先の保育者と交流することによって、多くの刺激を受け、各自日々の保育に役立てようとする姿が見られた。また、自園と相対化する中で、自園の取り組みについて保育者同士で振り返る場面も多々見られた。

(オ)地域協働による保育づくりの重要性の認識

S保育園が属している地域社会から外部評価者を招聘し、園の取り組みについて評価してもらい、改善点などを考えてみる時間を設けた。外部評価者に加え、S保育園の法人理事長、研究会の構成員を含め全15人での会合を持った。保育所第三者評価項目に基づいて作成、事前配付された資料をもとに活発な意見交換が行われた。単なる点数付けの「評価」ではなく、意見の交換という形をとったことで、園外の方々より、保育園の取り組みや運営に対する理解を深め、参画につながる良いきっかけを得ることができたように思われる。信頼される開かれた保育所づくりのための第一歩の感を強くした。また、保育園内における自己評価の結果の客観性、妥当性、適切性を確保することにもつながり、「地域とともにある保育」の在り方、改善点を考えるよい機会となった。

5. おわりに

本研究では、「評価」を通じて、保育園の内からの改善と外との接続を図り、質的な向上へとつなげていく方法について実践的に考察した。「評価」を単なる良し悪しの判断ツールとしてではなく、職員間、さらには地域社会と保育所との「協働」のツールとして位置づけたところに本取り組みの特徴がある。しかしながら、図2の手順を一回行っただけで意味をなすものであるとはいいがたい。確かに、目に見えて意識の変化が醸成されてきた。だが、それだけでなく、外部評価の結果を図2の(9)実践につ

なぜ、循環するサイクルの定着を図ることこそ肝要である。ひいては、これによって、保育所を中心とした子育て文化が醸成されることが望まれる。これからも動静を見守りつつ、地域に活きる保育づくりの意味を吟味し、評価を含めた保育現場の質の改善に向けた在り方について探求していきたい。

付記

本研究は、平成 22 年度山口県ひとづくり財団研究・研修助成事業助成金を受け行いました。研究にご協力くださいました「さくら地域づくり研究会」の青木トシ子様をはじめ、研究組織の皆さまに心より感謝いたします。

■引用・参考文献

- 天野珠路（2009）保育所保育指針の改定の経緯と趣旨 別冊「発達」新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて 無藤・柴崎（編）27-40.
- 「保育プロセスの質」研究プロジェクト代表者小田豊（2010）子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために— 幼児教育映像制作委員会
- 「保育プロセスの質」研究プロジェクト主任研究者秋田喜代美（2011）子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために（実践事例集）— 財団法人こども未来財団平成 22 年度児童関連サービス調査研究等事業報告書
- 福田敬（2011）福祉分野における第三者からの評価の必要性. 月刊福祉, 94（7）, 12-15.
- 刈谷忠（2011）さらなる質の向上をめざして. 月刊福祉, 94（7）, 37-39.
- 厚生労働省（2010）保育所における自己評価ガイドライン.
- 教育調査研究所（2007）「学校の外部評価と説明責任」のあり方の研究 研究紀要第 87 号.
- 丸山裕美子（2011）保育所が最もふさわしい生活の場となるために—保育所版第三者評価基準の改正—. 月刊福祉, 94（7）, 20-25.
- 松本信吾・中坪史典・杉村伸一郎・林よし恵・日切慶子・正田るり子・藤橋智子（2012）保育カンファレンスの外部公開は内部の保育者に何をもたらすのか. 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 40, 177-182.
- 増田まゆみ（2009）保育の計画・評価と保育の質の向上 別冊「発達」新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて 無藤・柴崎（編）143-154.
- 澤井洋子・駒井美智子（2007）ビデオによる自己評価点検に関する研究—保育士のビデオ自己点検評価に関する報告—, 45（2）, 111-121.
- 朴信永・伊藤一統（2011）協働によるよりよい保育所保育を目指した PDCA プログラムの開発—確かな実践力の育成に向けて— 平成 22 年度ひとづくり財団研究・研修助成事業成果報告書 青木・濱本（監修）さくら地域づくり研究会.
- 柴崎正行（2009）保育所における自己評価 別冊「発達」新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて 無藤・柴崎（編）155-158.
- 社団法人全国保育士養成協議会現代保育研究所（2009）, やってみよう！私の保育の自己評価 株式会社フレーベル館
- 垂見直樹（2010）保育・幼児教育における評価制度の現状. 近畿大学九州短期大学研究紀要, 40.

37-46.

民秋言（2008）保育士のための自己評価チェックリスト 萌文書林.

山崎晃（2010）保育をめぐる「評価」. 保育学研究. 48（1）. 76-91.

財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構（2011）私立幼稚園の学校評価における第三者評価調査報告書. 平成 22 年度文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」テーマ「幼稚園における学校評価の推進の在り方」.

全国保育士養成協議会（2007）保育所第三者評価の実態—保育所をよりよく理解するために— 児童福祉施設福祉サービス第三者評価機関（HYK）.